令和4年度デンマーク社会福祉研修

Nishisenboku H.S.
Social Study in Denmark

参加生徒

佐藤　　陽　（西仙北中　出身）
伊藤　広野　（南外中　出身）
小松　弘人　（平和中　出身）

引率教員

加藤　英明　　大釜　美佳子

デンマークと日本の違いについて

２年Ａ組　佐　藤　　陽

今回のデンマーク社会福祉研修を通して、私が日本とデンマークの違いについて関心を持ったことは大まかに三つあります。

一つ目はデンマークの福祉制度についてです。デンマークの消費税率は25％と世界的に見てもかなり高めです。これだけを聞くと、デンマーク＝税金の高い国というイメージを持たれがちですが、実はデンマークは世界幸福度ランキングでも一二を争う福祉国家です。医療費・教育費は無料だったり、18歳以上になると一人暮らしのための生活補助があったりと税金を使って多くの支援を国がしてくれます。そのおかげもあってか、デンマークでは国民の選挙の投票率が80％以上もあります。日本と比べた時の税率の高さに驚きましたが、その分サポートが手厚く、国民の支持を得ていることが興味深く感じました。

二つ目はデンマークの高校についてです。訪問した北フュン島高校で、実際に授業を見学させて頂きました。その中でも私が特に印象に残ったのは、授業スタイルの違いです。デンマークでは、『自立を尊重すること』に重点を置いており、高校の授業もディスカッションを中心に進行します。私が参加した授業でも、先生が質問を投げかけ、それに対して生徒同士が自分の意見を述べあうスタイルでした。授業は一コマ95分で行われ、一日４時間で時間割が組まれているということに驚きました。95分という長い時間でも生徒たちのほとんどが集中して授業に臨んでおり、すごいと思いました。また、日本の高校とは違って服装についての特別な規則はなく、私服でラフな格好の人が多かったです。日本の高校ではあまり見慣れないので、日本の大学生のように感じました。今年の10月にはこちらの西仙北高等学校にも訪問するという話だったので、とても楽しみにしています。それまでに英語能力の向上にも努めたいです。

三つ目はノーフェンスホイスコーレ寮についてです。ノーフェンスホイスコーレ寮では、２日間の間、３食と宿泊でお世話になりました。ノーフェンスホイスコーレ寮は、1980年に前理事長の千葉忠夫さんが福祉を学ぶ人達のために設立した学校です。今回研修を担当してくださったモモヨさんはこの学校の教頭先生として活躍されていました。モモヨさんは北海道出身で、高校を卒業後30年以上デンマークで生活しており、英語やデンマーク語が堪能な方でした。このノーフェンスホイスコーレは元々小学校として使われていたらしく、今では成人向けに学びを提供する国民学校として認可を受け、色々な国籍、様々な年齢の方が学んでいました。この寮でお世話になっている期間は、寮生達との交流を重ねることができました。一緒にご飯をたべたり、夜にはパーティをしたりと楽しく過ごしました。僕が参加したパーティは『ギャラクシーカップ』といって、あらかじめ決められたグループで対戦をするという内容でした。ゲームはお菓子の早食い、誕生日のバースデーカード作り、お菓子を食べながら走る往復リレーの３種類を行いました。どれも楽しかったです。ここでは夏季休暇期間と冬期休暇期間の間に、短期留学も募集しているみたいなので、機会があったらまた行ってみたいです。

今回の貴重な経験を生かし、海外にも目を向けるなど色々なことにチャレンジしていきたいと思います。

デンマーク社会福祉研修を終えて

1年A組　伊　藤　広　野

今回の研修で見学させていただいたのは、幼児統合施設と青少年特別支援施設です。幼児統合施設では低学年の子どもの様子から見せていただきました。到着してすぐに気づいたのは、子どもたちが自由に遊ぶ様子です。施設の中には遊び場の他にキッチンなどもあり、キッチンは扉が開けっ放しで自由に出入りできていました。そして壁にはてんとう虫や家など様々な絵が書かれており、楽しく過ごせることが想像できました。そして晴れの日はだいたい外で遊ぶなど、日本とは大きく違う事が分かりました。それから高学年の子供が活動する場所に案内してもらいました。こちらの子供たちも活発に、そして楽しそうに遊んでいました。僕達も少しだけ子どもたちと遊びました。自分たちが訪れたときは男の子を中心にサッカーをしていました。みんな楽しそうにスライディングをするなど、泥だらけになることなど少しも気にせず一生懸命に遊んでいました。室内で遊んでいるグループもあり、その子どもたちに折り紙のツルを折ってあげました。子どもたちや先生も喜んでくれて嬉しかったです。

続いて訪問したのは青少年特別支援施設でした。対象となる年齢が17～25歳までで、主に学習障害や精神面で悩んでいる人のための施設でした。生徒数は75人ほどいると説明を受けました。見学したときの授業はコース別になっていて、創作、スポーツ、キッチン、木工や金工のような多様なコースがありました。そして自分が驚いたのは、自転車を修理するための工房があり、そこでいらなくなった自転車の部品を再利用し、全く別のものを作っていたことです。例えば、自転車の部品をリサイクルしたイスや、３台自転車を上に繋げたアート作品もあり、発想の柔軟さに衝撃を受けました。

今回の研修では高校の授業に参加したり、ホームステイすることも計画されていました。自分たちが行ったのは北フュン島高校で、1979年に創立した比較的新しい学校です。全校生徒は400人ほどで、35人の先生がいました。デンマークの学校は８月に始まり、６月でその一年が終わるシステムになっていると説明してもらいました。日本と大きく違うと感じたのは、服装に関する校則がなくみんなの服装がカジュアルで、授業中でも自由にスマホを使っていることです。授業時間は95分と長いのですが、ずっと座って先生の話を聞いているだけでなく、お互いに話し合う時間も多くありました。さらに先生たちの働き方も日本とは大きな違いがありました。先生たちは基本残業がなく、自分の授業が終わったら帰えることを知り驚きました。

ホームステイでは、はじめは緊張していてあまり会話がはずみませんでしたが、緊張感がほぐれるに連れて少しずつ会話ができるようになりました。ホームステイ先の人たちはみんな優しくていい人でした。またそこの家では犬と馬を飼っていました。最初馬を近くで見たときはびっくりしましたが、すごく可愛いい動物だと感じました。最終日には家族とトランプで遊ぶなど、すごく楽しく過ごすことができました。

最後にデンマークという国そのものについて感じたことや分かったことについて記します。デンマークは自転車王国とも言われ自転車で通学する人が多く、電車の中に自転車を持ち込むことができます。それから、名古屋にテーマパークができたレゴですが、もともとはデンマークが発祥の地で、幼児統合施設でも子供たちはそれを使って遊んでいました。さらに日本とデンマークの違いで、一番記憶に残っているのは主食の違いです。日本は米が主食ですが、デンマークは、パンや芋が主食でした。僕が強く印象に残っているのは黒パンで、中に種が入っていて少し酸っぱいです。僕は食べるのに苦労しました。また消費税や所得税が高いことが、充実した教育や医療を支えていることを実感することができました。

今回のデンマーク研修はコロナ禍での開催でした。日本ではまだマスクをしていますが、デンマークではマスクをしている人はほとんど見かけませんでした。出発前は少し不安な気持ちもありましたが、自分を含めてみんなが元気に研修を終えることができて本当に良かったです。この研修には大仙市から支援を頂いてます。そして家族からもたくさん協力してもらいました。ホームステイ先の家族を含めてこの研修に関わった人たちに感謝したいと思います。

デンマーク社会福祉研修を通して学んだこと

1年A組　小　松　弘　人

私が、今回の研修を通して学んできたことを紹介します。

まず、社会福祉に関連した施設を二ヶ所見学しました。１つ目は保育園と幼稚園が一体となった幼児統合施設です。こういった教育現場で働いている人はペタゴーという資格を持っているようです。幼稚園、学童保育、障碍者施設などで生活支援をする人にとって必要な国家資格です。さらに今回訪問した全ての施設に共通する特徴でもありますが、玄関には全職員の顔写真と名前が表示されてありました。もしかしたら、仕事に対する責任感をもたせるのがその理由ではないかと考えました。また日本では保護者に対して子供の様子や連絡をノートに書いて知らせますが、インターネットを活用し通知しているそうです。情報化といった点でも先進的であると思いました。

２つ目に紹介するのは青少年特別支援施設です。ここは、発達障害などを持っている17歳から25歳が対象となる学校です。この学校は二つの目的のためにあるそうです。ひとつは学習能力を他の高校生と同じレベルにすること。もうひとつは自立できる力を養うなど、大人になる準備をすすめることです。学校の中にはたくさんのアート作品がありました。一番驚いたのは自転車の上に木の板を固定し、飲み物や食べ物がおけるようにしたテーブルがあったことです。完成度の高い作品だったので、生徒が作ったものではなく指導する先生方の作品だと思っていました。調理の仕方を学ぶコースでは、パスタを作っていました。手順を確認しながら、一生懸命取り組んでいる様子を見せてもらいました。

３つ目に紹介することは、体験授業に参加させてもらった北フュン島高校のことです。この高校は進学者が多いなど、レベルの高い授業が行われている学校のようです。私達が参加した理科や数学の授業は基本デンマーク語で進行していたので、推測しながら授業に参加しましたが、正直理解できない部分もありました。そして何より服装面などが日本と大きく違う点が印象的でした。高校には制服がなく自由な服装であることに加え、ピアスをしている生徒も少なからずいました。理由までは分かりませんでしたが、先生に断ることなく教室から出たり、入ったりする生徒もいました。このような自由な雰囲気ではありますが、生徒は学習に対して真剣に参加していて、全体としては規律ある雰囲気でした。もうひとつ特徴的だったのは、先生が机間巡視中に聞きたい事があるときは、生徒が人差し指を上に向けるなど特別なサインがあることでした。

高校での体験授業と同時に、高校生の家にホームステイをさせてもらいました。私がお世話になった家族は本当に優しい方々で、自分のことを色々と気遣ってくれました。また偶然自分のホスト役の高校生が誕生日で、一緒にパーティにも参加させてくれました。パーティにはポーランドの親戚の方も参加し、アットホームな雰囲気でした。そしてその高校生がもらった誕生日プレゼントに驚きました。彼女がもらった贈り物はお酒でした。デンマークでは16歳からお酒を飲めるようで、国によってまるで違うとあらためて思いました。そして研修の最終日になる頃には、お互いに打ち解け楽しくホームステイを終えることができました。一番不安で心配していたホームステイですが、今思うと一番楽しかった思い出となっています。

今回の研修のメインテーマはデンマークの福祉について学ぶことです。私達が見学した２つの施設でも感じましたが、この国は本当に手厚いサポートがある国でした。教育や医療は基本無料で受けることができます。さらに問題を抱えていたり、介護が必要な場合は国が責任を持って支えてくれます。これは消費税や所得税が高いから可能になっていると教えてもらいました。このことはデンマークの投票率が80％と高いことにも関係がありそうです。さらに今回考えたのは、この国の支援の他に、お互いを支え合おうとする国民の考えが根底にあるように思いました。そしてこの貴重な体験を通して、困っている人がいたら積極的に声をかけて手助けするなど、自分も人を支えられるような人になりたいと考えるようになりました。最初は不安な研修でしたが、自分のものの考え方を変える貴重な体験となりました。

研修を振り返って

引率　加　藤　英　明

今回の研修を無事終えることができた。引率職員として、そして一人の研修参加者として、この２つの視点から本研修について振り返ってみたい。

今回のデンマーク社会福祉研修は、３年ぶりの実施であった。２年間のブランクがあったのは、もちろん新型コロナウィルスの流行によるものである。今回も中止となる可能性は十分にあった。しかしデンマークをはじめ多くの国々が通常の行動様式に戻っていたことと、日本においてはマスク等の感染予防はなされているが、行動制限が課されていないことにより、実施にこぎつけることができた。

ただ例年との一番の違いについて記すならば、直通便がないことで往復の移動にかかる時間が大幅に増えてしまった。このことにより、これまで５日間だったデンマーク内の研修期間を４日間に短縮せざるを得なくなった。さらに長時間のフライトは体力的にも厳しいものだった。幸いにも帰国後も含めて体調を崩す参加メンバーはおらず、コロナに罹患せずにすんだことは本当に良かったと安堵している。そして無事大曲駅に到着し、生徒が家族の顔を見て柔らかな表情も浮かべたのを見て、最低限の責任を果たすことが出来たと実感した。

続いて研修に参加できた者としての感想であるが、私自身海外旅行の経験が少なく本当に貴重な体験をさせてもらったと感じている。デンマークの街並みは本当に美しく、今でも記憶に強く残っている。私達がヨーロッパの風景としてイメージする町並みがまさに目前にあり、そのことが日本から遠く離れた異国にいることを強く意識することにつながっていた。

またデンマーク王国に関してノーフェンスホイスコーレのモモヨ・ヤーセン氏より様々なことを教えていただいた。私たちはデンマークのことを「世界一幸福な国」などと安易に呼んだりするが、当然今の状況に至るまでには多くの努力の積み重ねや様々な歴史があり、彼女の説明にはこの福祉システムを築き上げた自国デンマークに対する自尊心に溢れていたように思う。

さて、私が本研修を通じてデンマークについて学んだことはふたつにまとめられる。ひとつは多くの人がすでに知っている優れた福祉制度についてである。福祉はもちろん、教育や医療も含めて、国が責任を持ってそのサービスを提供してくれる。このことは様々な税金が高いことにより実現していることであり、モモヨ・ヤーセン氏によれば、「返してもらう」という意識らしい。蛇足であるが、デンマークで日本車を購入するとその価格は日本での定価の３倍ほどになってしまうようだ。

もうひとつは多様性を受け入れ、個人が尊重されていることである。日本のように協調性が重視される社会ではなく、ひとりひとりの存在が大切にされていると感じた。教育においてもこのことが根幹にあり、例えば学習においてまだ十分な実力がないと判断されれば、躊躇なく留年させる。同じペースで進むのが大切なのではなく、必要な能力を確実に向上させることに主眼が置かれていた。

高福祉であることで将来に対する不安から開放され、そのことにより今現在の生活を楽しみ充実させている、これが私のデンマークの人々の印象である。

デンマークでの出会いと学び

引率　大　釜　美佳子

コロナ渦ではバーチャル技術が進化し、私たちは自宅で様々な仮想旅行経験をすることができます。動画や写真の中にも発見があるので、そこで得ることも多くあります。しかし、実際に海外へ行き、失敗を恐れず挑戦して得られる成長の素晴らしさを改めて感じることができました。例えば、初日には思いっきり緊張してうまくしゃべれなかったとしても、次の日は失敗を恐れずに片言から積極的に話しかけてみると、そこで交わす会話から１語ずつボキャブラリーが増え、身振り手振りのボディーランゲージや写真を見せて伝えようとすることでさらに会話が弾むようになっていくという経験です。このようにして私たちが得られたデンマーク福祉研修での出会いや学びのいくつか紹介したいと思います。

ノーフェンスホイスコーレで出会ったのは、副校長であり今回の研修のコーディネーターであるモモヨさんです。日本語や英語よりもデンマーク語の方を流量に話し、聡明さとエネルギーを感じさせる口調と、周囲から信頼され慕われている様子に、同世代ながらカッコよさを感じさせる人でした。なぜデンマークに来たのか興味をもちお話を聞くと、北海道に住む高校生だったモモヨさんは新聞記事を読んで感銘を受けたこの学校の創始者である千葉忠夫さんに手紙を書き、高校卒業後すぐにデンマークに行った行動派ということも分かりました。デンマークで30年以上暮らすモモヨさんは、日本の「こうあるべき」「一つの正解を求めがちな考え方」に対し、デンマークには「これがスタンダード」といった考え方がなく、他人からの評価などに焦点を当てず、「自分はどうありたいのか」を大切にする文化があることを教えてくれました。また、同じく終戦を迎えたデンマークと日本ではあるけれども、デンマークは生活福祉に、日本は経済にベクトルを合わせて成功してきた過程があることを説明しながら、「デンマークは経済よりも生活福祉の向上の方を優先してきたし、デンマーク人は日本人よりささやかなことも幸福だと捉えているから、幸福度ランキングで比較したり、過程を考えずに今だけの結果を切り取るのは違うような気がする…。日本の経済力は素晴らしいのよ。」と。文字やデータのような情報よりも、そこで暮らす人と実際に会話をする中で得られる納得感や日本についての再発見もありました。

また、ノーフェンスホイスコーレの学生さん達からも得ることが多くありました。日本人を含む外国人生徒だけでなく障害がある人も授業や寮生活を共にしており、私たちもそこに加えてもらいました。入学理由や国籍や年齢もバラバラで多様性が溢れ、短期滞在の私たちにも関心をもってくれました。初めて見る料理の食べ方を教えてくれたり、一緒に食事をしようと声をかけてもらったりと、お互いを認め受け入れ合う雰囲気がありました。社会に求められるスキルを身に付けるのではなく、自分自身の内側にある幸せや関心について学ぶために集まっていることが、「ホイスコーレ」が「人生の学校」とも呼ばれる理由だと思いました。そして人生に迷ったときに一歩立ち止まることができる環境がそこにあるということも知ることができました。

さらに、ホームステイを受け入れてもらったイエベ（デンマークでは先生のこともファーストネームで呼びます）とそのファミリーからは、仕事とプライベートの価値観の違いを学ぶことができました。イエベは北フュン島高校の副校長で、医師である奥様のロニーと９歳と６歳の子どもたちと暮らしています。イエベは授業が終わると退勤し、子どもたちを小学校へ迎えに行き、夕飯の支度を始めます。その頃にロニーが帰宅し、２人で夕食の準備をしながら私や子どもたちの話も聞いてくれます。子どもたちは、本を読んだり、タブレットで音楽を聞いたり、私とおりがみで遊んだりと、ゆったりとした時間が流れます。デンマークでは、労働環境が８時～16時までの週37時間と制度として決められており、残業という概念もほとんどありませんでした。プライベートを充実させることが社会活動の向上につながるという考えや、仕事以外の時間は家族と過ごしたり自分のために充てていることも知りました。このような時間や心の余裕がデンマークなのかもしれないと思いました。

これらのことを通し、学ぶことや生活することを心から楽しむために努力するデンマークの価値観に魅力を感じ、私自身の気づきとして毎日の学びや生活を楽しむことを忘れずに大切にしたいと考えています。そして３年ぶりに行われたこの研修に参加した生徒たちが生き生きとした表情で頼もしく成長していくのを、何よりも嬉しく感じました。多くの方々に支えられたこの研修を無事に終えることができ、ほっとしています。ありがとうございました。

新聞記事

日本との違いを学ぶ

西仙北高デンマーク研修

研修の報告をする３人

社会福祉研修としてデンマークを訪れた西仙北高校の1、2年生3人がこのほど、大仙市役所を訪問し、老松博行市長に報告した。

同校では福祉先進国デンマークを訪れ、社会福祉の仕組みや考え方を学ぶとともに、語学力や異文化理解力、コミュニケーション能力を高めてもらおうと、1998年から社会福祉研修として生徒を派遣している。コロナ禍ということもあり3年ぶりの実施となった。

研修は今年1月8日から15日までの日程で実施。参加したのは2年生の佐藤陽さん、1年生の伊藤広野さん、小松弘人さんの3人でノーフュンスホイスコーレ（旧日欧文化交流学院）へ短期留学し、同学院のカリキュラムに沿って講義や施設見学などの研修を受けた。デンマーク滞在期間のうち2泊は北フュン島高校の生徒宅へホームステイし交流を深めた。

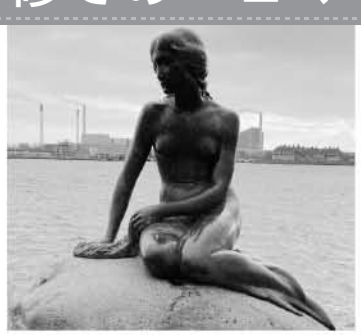
市役所を訪れた3人は「デンマークでは16歳からお酒が飲めるなど生活様式が違った。オープンな性格の人が多く、自分から話しかけてきてくれた」（小松さん）、「高校の授業はディスカッションがメインで、自分達で話し合っていてびっくりした」（佐藤さん）、「校則があまりなく、私服で自由な感じがした」（伊藤さん）などと報告。

佐藤さんは「デンマークでは消費税が25％で、医療や大学まで学費が無料になるなど学生の援助に多く使われていた。高い消費税について現地ではみんな納得しており、日本の消費税を話すとびっくりしていた」とも話した。

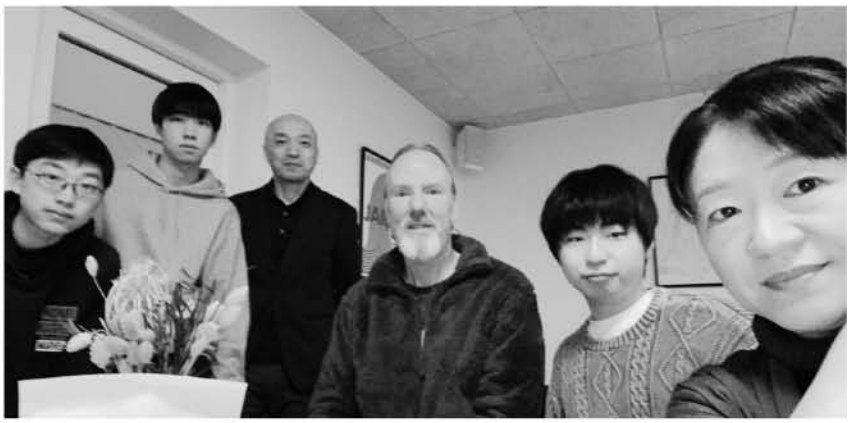
老松市長は「想像を超えた世界で、良い意味で刺激を貰ったと思う」と述べ、生徒達の報告をじっくりと聞いていた。

2023年2月16日木曜日
秋田民報より掲載

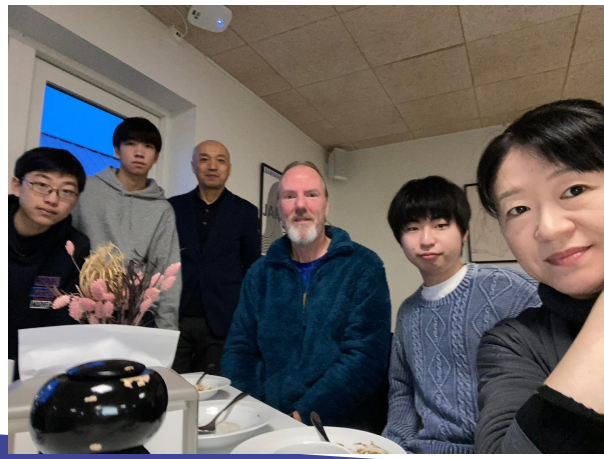
研修での一コマ

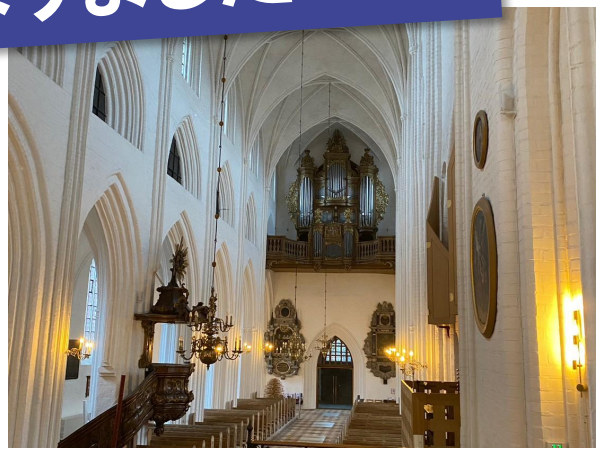


研修での一コマ



研修での一コマ



デンマーク福祉研修は、私達にとって

学ぶことの多い貴重な時間となりました！